

異文化的状況における人間の思考と行動 — 在日インドネシア人留学生と日本人の旅行から —

有 川 友 子

要 約

本稿は異なる文化的状況での人間の思考と行動の関係を解明するにあたり、「文化」を集団のレベルと個人のレベルに区別して捉えた。マクロの「文化」を人間が他者との接触を通して培ってきた、共有される認識及びそれを元に外的に表れるものとし、その「文化」についての個人の認知構造を「カルチュラル・モデル（カルチュラル・スキーマ）」(Holland & Quinn, 1987)とした。そして民族誌による調査から在日インドネシア人留学生と日本人の旅行を事例として取り上げ、異文化を持つ人々が接触する際の個人の認知と行動について分析した。

この分析から明らかになったのは、異文化的状況においては、特に新参者は相手に合せる必要があるか、自分達の主体性を守れるかの判断をし、可能な範囲で自分の納得のいくように行動しようとしていたことである。また、当事者はそれぞれのカルチュラル・スキーマを活用してその状況を解釈しながら行動すると共に、相手との接触を通してお互いについての認識を発展させていた。その際、当事者間の異なる認識が異なる行動として表れ、問題となることがあった。しかし、当事者双方が問題を認識するとは限らず、片側のみが気付いた場合、問題解決には至らなかった。異文化的状況での人間の思考と行動を理解するには、マクロのレベルでの異なる「文化」を理解した上で、具体的状況下での当事者それぞれの思考と行動の関係について解明する必要がある。

1 はじめに

異なる文化的状況におかれた人間はどのように考え、行動するのであろうか。日本でも異文化接触やそれに伴う問題について、教育的、人類学、社会学、心理学、異文化間コミュニケーション、言語学等の分野から研究が行われてきた⁽¹⁾。しかし、箕浦(1987)は異文化接触のこれまでの研究を振り返り、理論面の弱いものが多いことを指摘している。色々な方法論で異文化接触の研究が行われているからこそ、「文化」、「異文化」の定義を含め、どのような理論的枠組みで研究しているのかを明らかにすることは重要である。そして単なる実践的報告に留まるのではなく、研究者の理論的立場に基づいた分析を行い、異文化接触の様相について解明しなければならない。

異文化接触を経験するグループの一つである在日留学生についての調査は多い⁽²⁾。確かに留学生が抱える様々な問題（例：言葉・住居・友人・生活費・勉学）の把握も大切である。しかし、それに留まらず、留学生がどのような体験をしながら生活しているのか、また、直面した問題をどう解決しようとするのかを、彼らの視点から理解することも必要だ。その為には異文化的環境での人々の思考と行動についての解明が求められる。

本稿では、まず、理論的枠組みとして、本稿での「文化」の捉え方を明らかにし、異文化的背景を持つ人々が接触する時の個人の認知と行動の密接な相互作用について検討する。異文化を持つ人々が接触する場合、その人々の外的行動だけで全てを理解することは出来ない。具体的に当事者が置かれた状況を把握し、接触した人々がどのような関係にある中で接触したのかを明らかにする必要がある。と同時に、当事者がどのような環境を経てきたのか、すなわちそれぞれの文化的背景を確認する必要がある。その上で、具体的状況での当事者それぞれの行動、そして当事者間の接触がそれぞれの内面的思考に与える影響について解明しなければならない。つまり、異文化的背景を持つ人々の接触についての研究には、少なくとも(1)当事者が置かれた具体的な状況、(2)当事者間の関係、(3)当事者の文化的背景、(4)各々の行動、(5)

この接触がそれぞれの思考に与える影響、について明らかにする必要がある (Arikawa, 1993)。このような観点から検討することにより、異文化的状況におけるダイナミックな人間の認知と行動の密接な関係の解明に近づくことができると思う。

本稿では、日本の光洋大学⁽³⁾に学ぶインドネシア人留学生についての民族誌⁽⁴⁾による調査から、留学生達がある日本人と共にした一泊旅行を事例として取り上げ、異なる文化的環境において人間が選択する行動と認知の関係について、特に旅行、時間、約束という事柄に絞って検討する。まず簡単に旅行を振り返り、考察において、前述の事柄について当事者であるインドネシア人留学生と日本人がどのように理解して、この旅行に参加していたか、それぞれの立場から解明する。インドネシア人留学生の文化的背景を把握すると、旅行に参加した日本人とインドネシア人との間の、これらの事柄についての異なる理解の仕方が明らかになる。そして、旅行中の具体的な状況でそれぞれがどのように考え、行動していたかを分析することにより、異文化的状況における人間の内面と外面の行動との相互作用を明らかにする。

2 理論的枠組み

「文化」の概念

異文化接触に関する研究においても「文化」、「異文化」の捉え方を明らかにすることは重要である。本稿における「文化」の概念について明らかにするにあたり、文化人類学、特に認識人類学の「文化」の概念の流れを踏まえる。「文化人類学の父」と言われるタイラー (Tylor, 1874) は「文化」を以下のように定義した。

Culture or Civilization, taken in its wide ethnographic sense, is that complex whole which includes knowledge, belief, art, morals, law, custom, and any other capabilities and habits acquired by man as a

member of society. (Tylor, 1874, p.1)

ここでは「文化」はある社会の人々の間で習得される知識を始めとし、芸術、法律、習慣等の全てを含む総体系とされた。この定義は非常に広範で、物質文化、外界に現れる現象を含む。しかし、この概念はあまりにも包括的であることから、「文化」をもっと狭めて捉える動きがその後の人類学において見られた。中でも認識人類学は「文化」を社会生活を共にする人々が妥当であると解り合っている「知識」であるとした⁽⁶⁾。つまり人間の生活の様々な事柄について、人々が共有し、当然と見なす内面的理解の仕方に限って「文化」とした。外界に現れる「文化」も元は人間が創ったものであるから、人間の頭の中にある「文化」についての知識体系を「文化」として捉えたのである。この視点では、ある集団に属する人々が似たように行動する場合、彼らがその行為がふさわしいという内面的理解を共有しているからだ、と説明することができる。

「文化」と「カルチュラル・スキーマ」

人間の行動を理解するには、外的に見える行動と共に人間の内面の動きを把握することが重要である。人間の内面を解明する試みの一つが認知科学のスキーマ (schema) 理論⁽⁶⁾である。ラメルハートとオットニー (Rumelhart & Ortony, 1977) は、スキーマとは人が自分の世界を理解するのに使う、記憶の中にある認知構造であるとして説明した。当初スキーマはある決まった形で記憶に存在するものとされた。しかし、現実到我々が記憶から呼ぶ起こす事柄は常に一定のパターンであるとは限らない。その時の外界の状況により柔軟に対応することもある。スキーマを記憶にある固定的な構造として捉えた当初のスキーマ理論の限界や、その後のコネクショニズム⁽⁷⁾の影響を受け、今日ではスキーマは、外界の状況に見合うべく内的に理解するために、過去の経験と現状についての認識から合せて作り出される柔軟な構造であるとされるようになった (Norman, 1986)。

この認知科学の影響も受けた人類学者ホランドとクイン (Holland & Quinn, 1987) は、ある集団の人々が共有する、ある事柄の認識構造を「カルチュラル・モデル (cultural model)」⁽⁸⁾として捉え、人間が自分達を取り巻く世界の多様な事柄をどのように理解しているかについての研究を進めてきた。

「文化」を考える上で、人間が自分を取り巻く環境を内面的にどのように認識しているかを理解することは非常に重要である。しかし、認識人類学で捉えたように「文化」を人々の頭の中での様々な事柄に関する認知と捉えても、その分析は外に現れる人々の実際の言動を通して推測する。すなわち、人々の思考、認知構造だけで「文化」の全てを説明することも難しい。ダングラード (D' Andrade, 1995) は最近「文化」⁽⁹⁾を前述のタイラーの定義に戻し、人間の内面的な認知のみでなく、外界に現れる全てを含むものとして捉えるようになった。その上で、「文化」について語る際に、内面的なカルチュラル・スキーマ (cultural schema)、もしくは物質文化、というように、どのような「文化」を検討するのかを明確にする必要があると述べている (p.146)。

本稿では「文化」を集団のレベルと個人のレベルで別々に捉える。集団のレベルでの「文化」を人間が生まれ育つ環境の中で、他者との経験から獲得していく共有された認識、及びそれを元に人間が外的に表すものとする。そして個人のレベルの「文化」を「カルチュラル・スキーマ」として捉え、人間個人がある事柄に関して理解する認知構造を指すこととする。そして、人間の内的活動（認知）と外的活動（行動）を区別し (Leont' ev, 1981)、これらの相互作用を個人のレベルで検討する。この観点から「文化」の異なる状況での人間の思考と行動についての解明を試みる。

個人のレベルでの「文化」についての理解の仕方を「カルチュラル・スキーマ」として捉えることにより、人間の内面の動きを様々な側面から検討することができる。確かに人間の内面を「認知」「思考」の観点から検討することはできる。しかし、これだけではどうしても知識の側面が強調され過ぎる。人間の内面には所謂「感情」「価値」「評価」として表される側面もあり、こ

れらは我々の思考と密接に関係している。また人間の内面は外界の状況に対応して変化する可能性がある。本稿では、人間の内面を様々な要素の相互作用を含めたダイナミックな内的活動として把握し、その活動について検討するために「カルチュラル・スキーマ」の概念を活用する。

人間の内面の活動及び外的行動の密接な相互作用について、例として時間についてのカルチュラル・スキーマについて考えてみる。時間についての我々の認識は、一時間は60分であり、一日は24時間であるということや、ある地点からある地点まで何分かかるという単純な知識に留まらない。その認識は我々のこれまでの経験から獲得された様々な時間にまつわる情報を含む⁽¹⁰⁾。色々な仕事を抱えて忙しい人々の集団で会合が常に定刻通りに始まる場合、そこでは自分の時間も人の時間も無駄に出来ないで、時間厳守が当然であるという認識が共有されている可能性がある。

カルチュラル・スキーマの中には、我々をある行動に至らせる動機づけとして作用するものがある (D' Andrade & Strauss, 1992)。ある事柄が重要であり、価値を持つとして判断されれば、それに見合う行動に至る力が働くといえる。ある人の時間に関するスキーマにおいて、時間厳守が価値を持てば持つほど、その人は実際にそれに従う行動をとると思われる。また、その価値が重要であればあるほど、もし実際の行動でそれが実現出来なければ、当然とみなす認識と実際の行為とのずれが大きくなる。すると、カルチュラル・スキーマの感情的側面とも関係してくる。

時間厳守を正しいと考える人の場合、彼女自身その通りに行動し、また、接触する相手もそのように行動するのを見て、納得したり、満足することがある。その一方で、自分の信じることと相容れない行為を目の当たりにすることにより、不満を感じたり、不愉快に思ったりすることがある。絶対時間厳守の人が、時間にルーズな人と同一行動をとる場合、時間通りに事が運ばずに苛立つことがある。

また、後日似たような状況に出会った場合、過去の経験にまつわる感情も一緒に思い出すことがある。時間厳守の人が時間にルーズな人と再び一緒に

行動をとらなければならなくなった時に、以前の類似の経験を不愉快な感情と共に呼び起こすことがある。その一方で、その事柄にそれ程価値を見出さなければ、実行出来なくてもあまり問題とはならないであろう。時間にこだわらない人は時間にルーズな人と一緒でも苛々することはあまりない。ある事柄についての我々のカルチュラル・スキーマの中には行動に至らせる動機づけとして働く側面、また感情的側面を含むものもあることを把握しておく必要がある。

人間の内面の幾つかの側面について簡単に触れてきたが、明らかに人間の内面と外的な行動とは密接な関係がある。このことから、先に述べたように「文化」を集団と個人の二つのレベルから検討することは重要である。ある集団で多くの人々が似た行動をとることは多い。しかし全員がそこで当然とされる認識を必ず共有し、実際の行動に常に移すとは限らない。このような状況では「文化」を集団のレベルのみで検討することには限界がある。人々には共有される文化があると共に、個人差も存在する (D' Andrade, 1981)。似た環境に育っていても、二人の人間が完全に同じように考えたり行動するとは限らない。これはどのような集団であっても、一人一人の人間が考え、行動するからである。

このように人間は独自性を保ちながらも、常に他者と接触しながら生活を続けている。我々は一生を過ごす間に、特に身近な人々との関係から様々な事を学びながら自分のものにしていく。ヴィゴツキー⁽¹¹⁾によれば人間の認知は元々社会的なものである (Vygotsky, 1987)。我々の認識となる以前には常に社会での他者との接触がある。その経験が内面化されて我々の認識となる。個人差が存在しながらも、通常人々が社会生活をスムーズに送れるのは、つまるところ我々が他者と多くの部分を共有しているからである。このような人間の個性と他者との共有性の解明は、「文化」を集団と個人の二つのレベルに区別して検討することから可能になる。

異文化的状況における人間の思考と行動

本稿では、文化の異なる人々、すなわち、それまでの生活環境や経験（それ故に認知構造）を異にする人々が接触を持つ状況を「異文化的状況」と呼ぶ。既に述べたように、人間は生まれ育つ環境において常に他者との関係を持ちながら、自分を取り巻く世界について学んでいく。身近な人々との様々な経験を積み重ねながら、そこでの生活に関する様々なカルチュラル・スキーマを発達させる。ここで人間が最初に経験する集団で習得する文化を「第一文化」と呼ぶことにする。これらの多くはその集団の他者と共有されており、そのスキーマに基づいてとる行動は当然のこととして普通は問題は起こらない。

人が生まれ育った環境で一生を終え、他者との関係も大きな変化なく維持されれば、彼の文化的状況は変わらない。しかし、その人がある時点にそれまでの環境から新しい環境へ移った場合、新たな場にはそこに生活する人々が培ってきた文化がある（彼にとっての第二文化）。新しい所で新参者として生活を始めると、彼は第一文化の経験を活用しながら、新たな状況に対応することになる。人によっては、更に新しい環境に移り住む場合もある（第三文化、第四文化、……）。また、自分の住み慣れた所に、異なる環境で暮らしていた人々が新たに移り住み、その人々と関係を持たなければならなくなることもある。異文化的状況はこのように文化を異にする人々が接触する際に生まれる。

異なる文化を持つ人々が出会う状況では、文化を共有する人々の間で働く「暗黙の了解」がうまく機能せずに問題が生じることがある。確かに異文化的状況であっても、ある事柄についてのカルチュラル・スキーマが当事者間で似ていれば、実際の行動においてそれ程問題は起こらない。しかし、当事者それぞれがそれまで当然のこととしていた理解の仕方に基づく行動をとった場合に問題となることがある。それは、新しい集団において人々が共有する文化（第二文化）と、新参者が以前に居た所で共有されていた文化（第一文化）とが異なっているからである。両者の認識の差が大きい程、新しい人

の行動と、そこに以前から生活する人々の望ましいとする行動とのギャップが大きくなる。その結果、相手の行動が理解できずに誤解や問題の発生につながる。

異文化的状況における人々の行動を理解するためには、集団対集団がどのように行動するのかというマクロのレベルでの研究だけでなく、よりミクロの個人のレベル、すなわち具体的な状況下の当事者の外的行動と内的活動についての分析を行うことが必要である。その際、当事者それぞれが過去の経験により培ってきた文化についての理解を踏まえなければならない。

3 光洋のインドネシア人留学生と田中氏の旅行

光洋大学に在学するインドネシア人留学生は1992年当時21名⁽¹²⁾であった。しかし、光洋には他にも幾つかの大学があり、それらの大学に学ぶインドネシア人もいた。インドネシア人留学生会の光洋県支部は光洋大学の学生が中心に委員となっていたが、活動は光洋県全域のインドネシア人を対象としていた。インドネシア人留学生の友人関係、ネットワークは大学の枠を越えて出来ていた。

この留学生会光洋支部は五月の連休に一泊二日の旅行を企画した。当時の光洋支部長ザイナルと親しかった田中氏は、留学生会が旅行を企画していることを耳にし、自分から琵琶湖に案内することをザイナルに申し出た。その湖畔には田中氏の家もあり、そこに皆で一泊して近隣の観光地を回ることになった。

しかし、この旅行では様々な問題が生じた。まず当日の朝、綿密な計画を立て、30人の団体切符を購入していた田中氏の前に現れたインドネシア人は15人であった。前もって取りやめた人の他に、参加する旨連絡していながら当日現れない人がいた。この為、集合時間を過ぎても予定の電車でぎりぎり間に合うまで待つことになった。結局、こちらから電話して初めて不参加が明らかになったような状況であった⁽¹³⁾。

出発した後も、田中氏は予定通りに留学生を行動させるのに苦労していた。田中氏は皆を集団で一ヶ所から次の場所に移動させようと一生懸命であった。しかし、のんびり歩いたり、自由時間にしたものの集合時間ぎりぎりまで集まらない留学生がいたために、田中氏はやきもき、いらいらの連続であった。万が一全員揃わずに予定の電車に乗り遅れれば、次の電車にも乗り遅れることになり、彼の計画が狂ってしまう。それを避けるために、田中氏は必死であった。

一方、留学生側は、のんびり旅行を期待していたにもかかわらず、田中氏のあまりに急ぎ足の案内にあてがはずれてしまった。日本人の後ろにただ付いていくような旅行のつもりで参加したのではない、という不満を言う学生もいた⁽¹⁴⁾。ただ、ザイナルは田中氏は日本人としての善意と好意で皆を連れていってくれたこと、実際の参加者数が減ったために、その差額やその他にも田中氏がかなり負担したことは判るので、表立って文句は言えない、と言っていた。旅行が終わり別れる際には、田中氏に楽しかったと御礼を述べていた。

4 考 察

この旅行では、田中氏とインドネシア人留学生の間で、特に旅行、それに関連する時間、約束といった事柄についての理解の仕方に差が大きかったこと、そして、それぞれが自分達の考え方に基づいて行動しようとした為に問題が生じてしまった。表1はこれらの事柄に絞り、田中氏、インドネシア人留学生のカルチュラル・スキーマの知識の側面を、彼らの言動を元に再構築し、対比させる形で箇条書きにした。田中氏、インドネシア人留学生それぞれが、この旅行以前の様々な経験を元にこのような認識を持ち、今回の旅行に参加していた。それぞれのカルチュラル・スキーマ通りに現実に事が運べば、問題なく満足のいく旅行となったであろう。しかし、実際は自分の思い通りにはならず、相手の行動が自分の予期せぬものとなった。その為、困惑

したり、不満を感じたりする結果となったのである。

表1 田中氏とインドネシア人留学生のカルチュラル・スキーマの知識の側面

	田中氏	インドネシア人留学生
旅行	出来るだけ多くの場所を見て回る 計画を綿密に立てる 事前に必要な予約をする 計画に従って行動する	のんびり過ごす 楽しく過ごす 気ままに見て回る
約束	約束は必ず守る	約束を守る必要がある場合とそうでない場合とある その時にならないとわからないこともある 一度約束してから断るのは気の毒
時間	約束の時間に遅れない 時間通りに行動する 迅速に行動する	時間を守る必要がある場合とそうでない場合とある そうでない場合は遅れても構わない 遅れて始まる会合も多い

インドネシア人留学生の主体性

ここで重要なのは、インドネシア人の主体性である。ホスト日本人が日本にいる以上日本式に行動して当然であるという考え方の下に行動しても、インドネシア人側は必ずしもそうは受け取らない。仮に日本人から見て留学生が日本式に行動していても、それは彼らの判断によって必要と認められたからで、彼らがそれを問題なく受け入れているとは必ずしも言えない。この旅行でも、大体において田中氏に行動を合せていたインドネシア人達は、強行軍の旅行に従順に従っていたわけではない。不満ながらも田中氏のペースに合せざるを得ない状況の中での彼らの選択であり、それは彼らが好む旅行の形態でないことには変わりはなかった。

インドネシア人達は日本人に合せねばならぬ状況と、自分達が主体となつて行動出来る状況との区別をしていた。日本でやり方を理解すると、日本式に合せながら、限界はあつても、自分達の主体性を可能な限り守ろうとした。特に、インドネシア人自身が中心となる計画の場合には、彼らの主体性がより重要になり、価値を持った。田中氏との旅行では、インドネシア人達がこの旅行をあくまでも「自分達の旅行」と理解していたことから問題となつたのである。インドネシア人留学生はインドネシアにおいてそれぞれが経験したことにより培われたカルチュラル・スキーマを通し、旅行、約束、時間にまつわる文化を共有するようになっていた。

彼らは久しぶりの連休を利用したこの旅行で、言葉も不自由な日本の大学でのストレスから開放され、自由気ままにのんびりと過ごすつもりでいた。インドネシア語（場合によってはジャワ語）で友達と冗談を言い合いながらの楽しい旅行を期待していた。自分達の旅行だから日本人と一緒にの時のように日本人に合せる必要はないと思っていたのに、田中氏に無理矢理急がされたことは、時間に囚われずのんびり気ままに行くという彼らの理解する楽しい旅行の認識とかけ離れ、日本式の忙しさを押し付けられたように受け取り、不満が昂じたのである。光洋のインドネシア人留学生の集まりは、日本であるとはいえ、インドネシアでの会合に則ったやり方で行われるのが常であつたから、留学生会の旅行もその延長として捉えられていたのである。

光洋のインドネシア人留学生の会合

光洋でのインドネシア人留学生の会合においても、いつも開始の時間は決められていた。しかし、遅れて始まるのが普通であつた。また、大体何人参加してもあまり影響のない形で食事その他の用意が出来ていた。このような状況では大体の人数さえ把握していれば、参加人数にこだわる必要はなくなる。約束をはっきり守らないことについて、プラノヲは前もって先の予定ははっきり立たない、当日急に予定が入り、参加できない場合もある、と言っていた。プスパは、一度出席すると言ってしまうと、都合が悪くなつても、

せっかく誘ってくれたのに気の毒だとの気持ちから断り辛い、と教えてくれた。

この旅行について、田中氏が団体予約していることを前もって知っていたインドネシア人は、ザイナル以外いなかったようである。ザイナル自身、田中氏が30名で団体切符を購入したことを聞いて驚いていた。彼は30名はあくまでも予定の人数であり、旅行中は個人個人で切符の代金を払うつもりだったので、参加人数に変更があっても影響はないと考えていたと言っていた。また、宿泊先についても田中氏の家に泊まることになっていれば、大体の人数がわかりさえすれば十分である。田中氏との旅行をこのように理解し、最初参加と返事したものの、結局不参加を決めたインドネシア人がいたとしても不思議ではない。

ここで断っておかなければならないのは、インドネシア人がいつも時間に遅れたり、約束通り現れなかったりするわけではないということである。彼らにとって、どうしても事前の参加の連絡や時間厳守が必要な場合もある。そのような場合には彼らは必ず事前に連絡し、また、参加の際は、万難を排して定刻に間に合うように出かけていた。その一方で、彼らがそれ程重要性を認めない集まりは、無断で欠席をしたり、遅れる事を厭わないようであった。つまるところ、インドネシア人の行動は、彼女らがある計画をどのように理解、評価しているかという彼女らの認識と密接に関っていたのである。

インドネシア人と田中氏それぞれの思考と行動の相互作用

インドネシア人達は田中氏との旅行を通して、それぞれ日本人についてのカルチュラル・スキーマを発展させていた。せっかちな田中氏の行動を目の当たりにして、日本人の旅行はあまりにも忙しい、という理解を得たようである。元々彼らは、自分達の旅行であるからのんびりと気ままに楽しむつもりでいたにも拘わらず、それが実現しなかったわけで、その不満とも重なり、「日本人の後ろについていだけ（の旅行）なんて嫌だ。」となったのである。

この旅行においてはインドネシア人側が日本人についての認識を発展させ

ただだけでなく、田中氏もインドネシア人の習慣についての知識を発展させていた。田中氏はそれまでもザイナル達との交流を通してインドネシア人についての知識を得ていた。これらのスキーマはこの旅行でインドネシア人と寝食を共にする中で更に発展されたといえる。

それでもこの旅行では、田中氏は彼の理解する日本式の旅行に従って行動していたことは明らかである。サラリーマンの田中氏は、二日間で出来るだけ多くの観光地を留学生に案内しようと張り切っていた。田中氏の「ザイナルさんは琵琶湖だけでいいと言ったけれど、私が駄目駄目、色々見なければと……入れたのです。」という言葉からもそれは伺える。そして利用する電車の時刻も含む綿密な計画を立てた。彼はザイナルが伝えた参加予定の人数（30名）を元に電車の団体切符を購入、連日ザイナルのアパートを訪れてザイナルと打ち合わせていた。

田中氏は留学生に出来るだけ多くの観光地を案内するという思い（これは価値を持つものとして彼を動かす力となった。）のもとに一生懸命であった。しかも、彼にとって計画通りの旅行を遂行することが絶対的な価値を持ち、彼自身とインドネシア人全員の行動を支配できるものとして理解されていた。その為、彼自身それに従って行動し、インドネシア人達も自分と同じ様に行動することが当然であった。旅行についてのこのような内面からの強い力につき動かされて行動した田中氏は、インドネシア人達と一緒に行動したにも拘わらず、彼らの旅行についての異なる視点と、そこから生じた不満には気付かなかった。

田中氏がインドネシア人達を思い通りに動かせなかった数少ない状況の一つは、インドネシア人留学生で集合時間に遅れそうになる人々がいたことであった。田中氏がこれらのインドネシア人に対して苛々、冷や冷やしたのは、彼らが田中氏の信ずる（時間を守り、てきぱき動く）通りに行動しなかったからである。田中氏は全員が時間厳守で迅速に行動することを当然と考えていたから、予期せぬ彼らののんびりさに慌て、自分の思い通りに行動を修正させようと必死に努力したのである。ここにも田中氏の内面活動と外的行動

との緊密な相互作用が表れている。

ま と め

これまでインドネシア人留学生と田中氏の旅行において問題となったことについて、両者の旅行、約束、時間に関する異なる理解の仕方と、それが表れたそれぞれの行動との関係を中心に分析してきた。ここで明らかになったのは、まず第一に、異文化的状況では、当事者は単に相手に合わせるのではなく、各々が独自に判断して行動していることである。例えば新参者はホスト側に合せねばならないか、もしくは自分達で主導権を握れるかについて主体的に判断し、可能な範囲で彼らが望ましいとみなす認識に基づいて行動しようとしていた。第二に、当事者はそれまでの経験をもとに培って出来たそれぞれのカルチュラル・スキーマを活用してその状況を解釈しながら行動することである。そして各々がその接触の経験を通してお互いについての認識を発展させていた。それぞれのスキーマは感情や価値判断的側面を含み、各々の行動並びに相手との接触の経験と密接に関係していた。

そして第三に、当事者間の異なる認識に基づく異なる行為が原因で問題が生じた場合、当事者双方が問題を把握するとは限らず、片方は気付いているにも拘わらず、相手側は気付かずに自分の認識に基づいて同じ様に行動をとり続ける場合があることである。例えば新参者がある事柄を不満に思っている、ホスト側はそれまで通りに自分のやり方に従って行動し、その行為が新参者にとっては問題であることすら気付かないことがある。また、その逆の場合もある。ホスト側のみ問題に気付き、新参者は何も気付かずに、新しい環境においても以前と同じ様に考えて行動することがある。こうした状況では問題解決には至らない。

異文化的状況における人間の行動及び思考について理解するためには、事例として取り上げたこの旅行中の様々な具体的状況で、当事者である田中氏とインドネシア人留学生それぞれがどのような行動をし、何故その行動をとったのかということを解明することが重要である。その際、その状況を当

事者各々が内面的にどのように理解しているか、またその理解の仕方は各々の文化からどのように影響を受けているかを把握する必要がある。そして、それぞれが相手との接触をいかに内面的に解釈しながら、関連するカルチュラル・スキーマを発展させていくかを明らかにしなければならない。このような分析を通して、人間のダイナミックな内的活動と外的行動との密接な相互作用の解明に近づくことができる。

5 おわりに

異なる文化を背景とする人々の接触について、具体的な事例としてインドネシア人留学生と日本人との旅行を取り上げて分析する中で、当事者それぞれの考え方と行動の密接な関係が明らかになった。

「文化」をどのように捉えるかによって、異文化的状況下の人間についての検討の仕方は異なってくる。本稿では「文化」を集団（マクロ）のレベルと個人（ミクロ）のレベルとで区別して捉え、集団のレベルとしての「文化」を、人間が他者との接触を通して様々な経験をする中で培われる共有された認識、及びそれを元に外的に表れるものとして捉えた。また、「文化」についての個人の認知構造を「カルチュラル・スキーマ」と呼んだが、それは単なる知識に留まらず、その事柄についての様々な側面、例えば感情や価値判断に基づき実際の行動に及ぼす力も含むものとした。

異文化的状況における人間の思考と行動を理解するには、当事者の集団でそれぞれ培われてきた文化（マクロのレベル）を把握した上で、具体的な状況における当事者各々の内的活動と外的行動の密接な相互作用（ミクロのレベル）を明らかにすることが必要である。

人間のダイナミックな内的活動と外的行動の相互作用については、具体的な状況での我々の認知構造の持つ様々な側面（知識、感情、価値判断等）と行動との関係を更に詳しく分析しながら、今後の研究において解明していかなければならない。

注

- (1) 異文化接触を含めた「二つ以上の文化（自文化と異文化）に跨って成長期を過ごす青少年の教育（人間形成、文化学習）にかかわる諸事象（内容・方法、過程、結果、組織、環境など）」を扱う学際的な学問として異文化間教育学がある（江淵，1987）。江淵（1995）は異文化間教育学会発足15年目の第16回異文化間教育学会においても「学際的研究の理論的統合」の可能性の検討について述べている。
- (2) 例えば喜多村（1989）は大学の国際化との関連で、留学生、国際交流に関する調査研究の文献目録を載せている。『異文化間教育5』（1991）は「在日留学生と異文化接触」というテーマで特集を組み、巻末には関連の文献目録がある。留学生に関する研究の他に日本では帰国子女に関するものも多い。
- (3) 本稿に出てくる大学名及び人名はプライバシー保護の為に仮名にした。インドネシア人の名前には民族や信仰のわかるものがある。そのような名前をもつインドネシア人は仮名にもその特徴が生かされるように、情報提供者の協力を得て付けた。
- (4) 文化人類学における研究調査方法で、フィールドワークがその基本となる。研究者はある一定期間、研究対象とする人々と生活を共にしながら、参与観察やインタビューを通してデータを収集する。
- (5) グッドイナフは「文化」が人々の間で共有されるようになることについて理解するためには、個人がどのように「文化」を習得するのかを解明しなければならない、と述べている（Goodenough, 1981）。認識人類学の他に、人間の内面（心理）と文化との関係を研究する分野として、1960年代以降に「文化とパーソナリティ」学派を引き継いだ心理人類学がある。（箕浦：1984，1987）。
- (6) スキーマの概念やその特徴、また、スキーマ理論がどのように発展してきたかについては Arikawa（1993）が辿っている。
- (7) コネクショニズムでは、それまでの直列的な情報処理とは異なり、並

列的な適応システムに注目するようになった (Parallel Distributed Processing) (McClelland, Rumelhart, and the PDP Research Group, 1986)。そして人間の内面を非常にミクロのレベルで捉え、そこでは、外界の状況に見合うべく、その時その時にふさわしい形で関連するユニットを並列的に活性化させて作られる柔軟なシステムであるとした (Norman, 1986)。その時の外的状況に合せて内面的にパターンがその都度作られ、現状に合うように柔軟に適合し続ける。最近のスキーマとコネクションニズムの関係について、例えばダンダラード (D' Andrade, 1995) が考察し、文化を考える際にこれら両理論を応用する利点について述べている。

- (8) ホランドとクイン (Holland & Quinn, 1987) はカルチュラル・モデルの概念を紹介し、それを活用して様々な事柄についての我々の認識構造の解明を試みた論文を載せている。
- (9) 1980年代から1990年代前半に最盛期を迎えたポストモダン論者達は、それ以前の「不変で、競合することのない、統合体としての文化」を批判し、「文化は完全に多様で、皆が受容出来るものではなく、常に変化する」とした。クインとストラウスはこれらの「文化」の見方をそれぞれ両極端のものとして批判し、「文化」はこれら両方の特徴を合せ持つことから、この両側面を説明する理論が必要だと述べている (D' Andrade, 1995, p.147 からの引用)。
- (10) ラメルハートとオットニー (Rumelhart & Ortony, 1977) はスキーマの特徴の一つとして、辞典に見られるようなある事柄に関する定義というよりは、むしろ百科辞典に見られるような多様性を含む広範な知識であることを述べている。
- (11) 20世紀初頭の旧ソヴィエトの著名な心理学者。人間の発達、特に言語発達における社会・文化の影響についての彼の研究は、「文化」と人間の認知・行動の関係を考える上で非常に示唆に富む。彼の死後も弟子達 (前述の Leont'ev もその一人) によって彼の研究は引き継がれた。

米国においては1970年代からヴィゴツキーらの研究は紹介されるようになり、1980年代には「アクティヴィティ」理論 (Theory of Activity) を中心に知られるようになった (Wertsch, 1981)。

- (12) 光洋大学は関西地区にある国立大学で、インドネシア人留学生の中では理工系の大学院生が多かった。
- (13) 体の具合が悪くなったから参加出来なくなり、その日の朝ザイナルに電話したが、既に出発していて連絡がとれなかった、とのことであった。
- (14) こうした不満はインドネシア語で言われたために、田中氏の知る由もなかった。

引用文献

- 『異文化間教育』, 1991, No.5, (特集=在日留学生と異文化接触)。
- 江淵一公, 1987, 「シンポジウム異文化間教育と日本の教育の国際化: 主題設定の主旨と提案・討議の総括」, 『異文化間教育』, 19-26ページ。
- 江淵一公, 1995, 「(特定課題研究: 異文化間教育学の可能性—学会15年の回顧と展望—) 異文化間教育学の可能性と検討課題—問題提起—」, 『異文化間教育学会第16回大会発表抄録』, 66-67ページ。
- 喜多村和之, 1989, 『大学教育の国際化』(増補版), 玉川大学出版部。
- 箕浦康子, 1984, 「文化とパーソナリティ論 (心理人類学)」, 綾部恒雄編, 『文化人類学15の理論』, 中央公論社, 95-14ページ。
- 箕浦康子, 1987, 「異文化接触研究の諸相」, 「文化と人間」の会編, 『異文化とのかかわり』, 川島書店, 7-36ページ。
- Arikawa, T., 1993, *Grappling with a new culture : Dynamic courses of action and cognition of Indonesian university students in Japan*, (Doctoral Dissertation), Urbana, IL : University of Illinois at Urbana-Champaign.
- D' Andrade, R. G., 1981, "The cultural part of cognition," *Cognitive Science*, Vol. 5, pp.179-195.

- D' Andrade, R. G., 1995, *The Development of cognitive anthropology*, Cambridge : Cambridge University Press.
- D' Andrade, R. G. & Strauss, C. (Eds.), 1992, *Human motives and cultural models*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Goodenough, W. H. 1981, *Culture, language and society* (2nd ed.), Menlo Park, CA : Benjamin Cummings.
- Holland, D. C. & Quinn, N. (Eds.), 1987, *Cultural models in language and thought*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Leont' ev, A. N. 1981, "The problem of activity in psychology," in Wertsch, J. V. (Ed.), *The concept of activity in Soviet psychology* (pp. 37-71), Armonk, NY : Sharpe.
- McClelland, J. L., Rumelhart, D. E., & the PDP Research Group (Eds.), 1986, *Parallel distributed processing Vol. 1 & 2*. Cambridge, MA : the MIT Press.
- Norman, D. A., 1986, "Reflections on cognition and parallel distributed processing," in McClelland, J. L., Rumelhart, D. E., & the PDP Research Group (Eds.), *Parallel distributed processing Vol. 2* (pp.531-546). Cambridge, MA : the MIT Press.
- Rumelhart, D. E. & Ortony, A., 1977, "The representation of knowledge in memory," in Anderson, R. C., Spiro, R. J., & Montague, W. E. (Eds.), *Schooling and the acquisition of knowledge* (pp.93-135), Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Tylor, E. B. 1874, *Primitive culture*, Boston : Estes & Lauriat.
- Vygotsky, L. S. 1987, "Thinking and speech," in Rieber, R. W. & Carton, A. S. (Eds.), *The collected works of L. S. Vygotsky (Vol. 1)* (pp.39-285), New York : Plenum.
- Wertsch, J. V. (Ed.), 1981, *The concept of activity in Soviet psychology*, Armonk, NY : Sharpe.